

幸せ狂の灰被り

Needles Island

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幸せになるためにだったら、殺人鬼にでもなってやる。

灰被りエラ。あるいはシンデレラ。もしくはサンドリオン。ある童話に出てくる特定の少女の名。

灰とは贖罪の象徴。何かを燃やし、そのあとに残るもの。贖罪の末の幸福はあり得ても、贖罪の最中の幸福は誰にも認められない。

だが灰を被った令嬢はそれをこそ求めた。幸せになるために。恵まれない自分に、幸せを。例えどんな手段を使っても、最期に幸せだったらそれで良いのだ。

★前書き、後書きは必ず表示してください。近況報告でなく、小話が入りますので。

★殺人を推奨しているわけではありません。作品中の主人公の感情はあくまで彼女が感じていることであり、全ての人に当てはまるはずのないものです。いついかなる場合であっても、殺人は赦されないものです。

目次

幸せ狂の始まり	1
幸せ狂の転機	3
幸せ狂の不穏	7
幸せ狂の潜伏	11
幸せ狂の自覚	15
幸せ狂の殺人 1	18
幸せ狂の求婚	21
幸せ狂の戦慄	24
幸せ狂の殺人 2	27
幸せ狂の殺人 3	31
幸せ狂の誤算	34
幸せ狂の終焉	37
幸せ狂達の夢 (あとがきに代えて)	40

幸せ狂の始まり

その日は雨が降っていた。昔々から使い古されたフレーズ。主に葬式の時に使われるそれは、本日にごそふさわしい。何故ならカレラス男爵夫人ブランチが火葬されたその日であるからだ。母が燃えて灰になる様子を醒めた目で見つめる少女はそう思った。

(全て、上手くいったわ)

そう内心でほくそ笑みながらカレラス男爵令嬢アシュレイは沈痛な面持ちを隠さない。本当であれば拍手喝采の上で無礼講の宴を開きたくなるほどに浮かれていた彼女はしかし、それを露見させないために演技を欠かさないので。

(そうよ、簡単。演技なんてできて当然なの。だってそういう風に生きてきたんだもの)

弔問客にもそつなく返答し、未だ幼い彼女を世話するための人物は決まっているのかという問いにはもう既に、と返す彼女を疑うものは誰一人としていない。母を殺したのが、まさかこの十にも満たない少女であるとは誰も。

その側に付き添ってしかるべき父はいない。今なお激務に追われ、馬車で一時間もかからぬ王宮で血の涙を流しながらこきつかわれているだろう。父は下っ端の役人で、休みを容易に取る権利すらないのだから。忌引きなど効かない程に、革命を終えたこの国は忙しい。

ひとりぼっちの彼女の完璧な演技とはある女性が近づいてくるまで続いた。その女性は完璧な喪服に身を包み、憐れむようにアシュレイを抱き締めた。

「よく頑張ったわね、アシュレイさん」

「そう、でしょうか……ナターシャ様」

「ええ。だからもう強がらなくて良いの。わたくしのことは母だと思っただけはお甘えなさい」

にこりと笑ったナターシャの身体に顔を埋めながらアシュレイは身体を震わせた。誰もが涙を流していると思うだろう状況。しかしアシュレイは泣いてなどいない。

(嘘ばかり。お母様に死んで欲しかったのはナターシャ様も同じでしょうに)

それを微塵も感じさせないナターシャにアシュレイは恐怖を覚えただけだ。今後は恐らくナターシャの言いなりにならなければならぬだろう。それでもアシュレイは母を殺したかったのだ。

何よりも、自分が幸せになるために。

だからこそアシュレイは母を殺し、ナターシャを後妻として認めるのだ。その先に幸せがあるとわかっているから。二人の連れ子など問題にもならない。何故なら彼女らも同罪だから。アシュレイが捕縛される日がカレラス男爵家の終焉の日だ。

それを認識していないのが長姉で、認識しているのが次姉というだけのこと。認識していようがまいがアシュレイにとつてはどうでもよく、いざとなれば殺すことも厭わない。

アシュレイ・カレラスは、灰の歌と名付けられた少女は、どうしようもなく幸せに狂っていた。

その日は雨が降っていた。天が泣こうが何をしようがその事実は変えられない。男爵令嬢アシュレイは人殺しで、親殺しで、人の命をなんとも思わない狂った少女であった。

幸せ狂の転機

毎朝、誰よりも早く起きたアシュレイは、井戸から水を汲んでくる。使用人任せにはしない。そんなことをすれば、アシュレイの使うものに毒が仕込まれるかもしれないからだ。アシュレイは死にたくない。だからこそ水を汲んでくる。

そして誰もが起きてくるような時間までに清掃を終わらせる。そうすれば誰もアシュレイの部屋には近づかない。刃物や危険物を仕込んだりしに来ない。たとえ誰に見とがめられても今のアシュレイの格好は侍女だ。引きこもっている先妻の娘の顔など誰も直視しないからこそこんなことができる。

(よし、今日も綺麗ね)

それが終われば自分の部屋に戻り、部屋の中で栽培している野菜と毒が入っていないことを確認してある小麦で焼いたパンを食べる。対外的には母を失った精神的負担で寝込んでいることになっているアシュレイであるが、やっていることは最早寝込むどころの話ではない。貴族令嬢らしからぬ所業だ。

朝食が終わればまた部屋を抜け出し、侍女のお仕着せと自分が昨日着ていた服を洗濯する。服に毒や針が仕込まれないようにするためだ。それを自分の部屋のバルコニーに干し、今日着る服に着替えてベッドに潜り込んだ。

そしてそのあとは、アシュレイにとって暇であるとしか言い様なない幸せな時間。誰も怒鳴らない。誰も殴らないし、誰もトチ狂って刃物を持ち出したりしない。そんな使用人はナターシャが辞めさせたからだ。

本来であれば使用人がやるはずの仕事をアシュレイがこなせるのは、彼女にその経験があったからに他ならない。アシュレイを疎んじていたブランチは、淑女として受けるべき教育を彼女に施すことはしなかった。代わりに使用人同然の扱いをしたのだ。

それに比べれば今の生活は十分に幸せだ。幸せな気分になりながらとうとうと微睡んでいると、扉が叩かれる。訪問者だ。義母ナター

シヤに似た茶髪に近い金髪の女性は、入ってくるなり冷笑を浮かべた。

「あらアシュレイ。また服のまま寝ていたのね」

「ごめんなさい、ヘザー義姉様」

ややつり目のヘザーは、顔を見るだけで睨まれているように感じる。実際睨まれているのだが、それは仕方のないことだ。母が死んで以来3年もこうしていれば当然だろう。もっとも、睨む理由はそれだけではないのだろうが。

ヘザーは笑みを消すとアシュレイに言葉を投げつけた。

「いつまでもそうやっていられるとは思わないことね、アシュレイ。じきに貴女も社交界に出るの。いつまでもそんな甘えが許されると思って？」

「……分かっていきます」

「ふうん？　なら良いけれど……お義父様の顔に泥を塗らないで頂戴ね」

冷たくそう言い放ったヘザーは何をするでもなくアシュレイの部屋から立ち去った。残されたアシュレイは心のなかで毒づく。

（貴女が一番泥を塗っているわよヘザー。社交界に出たら、ですって？　貴女が社交界でどう蔑まれているのか私は知っているんだから）
それから数年も経たないうちに、アシュレイは病弱だということになった。いつまでもアシュレイが外に出たがらなかったからだ。出れば平穏な生活は出来なくなることが分かっていたから、アシュレイは社交界に出るのを拒み続けた。

それでも、アシュレイには断れない舞踏会がある。それはたった一つ。この国の至尊のお方からのお招きである。貴族令嬢ならば誰もが憧れてしかるべきその宴も、アシュレイにとっては平穏の邪魔ではない。

だからこそギリギリまで抵抗し、舞踏会にはもう間に合わない時間まで掃除をしていたアシュレイはしかし。

「私は行かなくても問題ありませんわ」

「でも、アシュレイ。貴女のために用意したこのドレスを無駄にしな

いってくれると嬉しいわ」

(何で行かないって言ってるのに用意してるのよクレアあ！)

二番目の姉クレアが侍女に広げさせたそのドレスは品の良いものだった。シンプルだからこそ着る者を選ぶ品。クレアになら似合うだろうと思えるそのドレスをアシユレイは手早く着せられた。

そして足元に出されたのは見覚えのある靴。数日前、クレア用にと用意されたはずの水晶が散りばめられた靴だった。

それを見てアシユレイは思わずクレアを怒鳴り付けていた。

「ちよつとこれ、クレア義姉様でしよう！」

「あら、わたくしに気を使わなくても良いのよアシユレイ。思ったより似合わなかったから別のものを仕立てたもの」

(う、嘘つき！)

そう言うクレアの足元の靴は古びたもの。それでも気に入ったのは確かで。年頃の娘以下とはいえ煌びやかな世界に憧れたことがないと言えば嘘になるアシユレイにとっては幸せ以上の過ぎた望みだ。

(行きたくない、いやでもちよつと、いやいや何言ってるの行ったら平穏な生活が！)

そんなアシユレイの内心の葛藤を見透かしたようにクレアは微笑して言った。

「アシユレイ。行って後悔するのと行かないで後悔するのなら、行った方が良いわよ」

「どうしてそう思うの、クレア義姉様」

「見たことがないものは怖いわ。でもね、アシユレイ。見ないとそれがどんなものなのかは分からないでしょう？」

だから見た方が後悔は少ないと思うわ、とクレアは締めくくった。その様はまるでアシユレイを唆す魔女のよう。だが、それでも。

(確かに、見ないとわからない。お母様を殺してみないとこの生活は出来なかった。なら舞踏会に行つて平穏が逃げていくかどうかなんて分からないじゃない)

それは実感から来る言葉だ。やってみなくちゃ分からないことは、やって納得しないと心にずつとトゲとなつて残る。もつとも殺人に

関してはやって納得した時点で人生に巨大なトゲが刺さるが。
だからアシュレイは決意した。外に、舞踏会に行こうと。行って後
悔しよう、と。

幸せ狂の不穩

「何でよ、何であんたが見初められるのよっ!」

カレラス男爵邸に響き渡る絶叫。それはアシュレイの義姉ヘザーの声。その声には嫉妬と羨望、そして多分に憎悪が含まれていた。それも当然だろう。社交界の華、特に《金薔薇》とまで称されるヘザーでなく、今まで社交界に出るのを拒んでいた小娘に王子グランヴィルの心を奪われたのだから。

(知らないわよ。私だって何でこんなことになったのか分からないんだもの)

アシュレイは心のなかでそう毒づきながら幸せを壊しにくるヘザーのドレスの裾を睨み付けた。ヘザーは周囲のものを手当たり次第にアシュレイに投げつけてきていたのだ。この行為はアシュレイにとって禁忌であるとも知らずに。

ヘザーはアシュレイにあたりながら涙を流す。

「何でわたしじゃないの! 何で! 何でこんな人殺しの——」

「ヘザー義姉様には分からないわ」

「何ですって!?!」

(だって、私にも分からないんだもの。分からないけど、今分かっていることは一つだけ。ヘザーは敵。私が生きるための、敵よ)

蔑んだ目でヘザーを見つめたアシュレイは、今夜もある舞踏会でヘザーを陥れることにした。まずは社会的に殺す。そうでなければアシュレイを壊した母のように悼まれてしまうから。そんなこと、赦せるはずがなかった。

今夜ヘザーが着るドレスは昨日のものとは違うもの。男爵家程度の資金力でも3日別のものを着られるドレスを3着用意したうちの、上品すぎず派手すぎない逸品である。黄色のノースリーブで、要所要所にリボンと薔薇が飾られているものだ。

アシュレイはそのドレスの裾にある薔薇とスカート部分に細工をした。薔薇は取れやすいようにハサミを入れ、スカート部分の縫製も甘くしておいたのだ。着付ける程度では取れないが、スカートを握り

締めるほどに強く引つ張れば千切れるように。

(恥をかくと良いわ、ヘザー。私の邪魔をするから悪いのよ)

内心でヘザーが失敗するのを思い浮かべながら、アシュレイはヘザーよりも後で屋敷を出ることにした。一緒に出たくなかったからだ。今日はクレアもヘザーと一緒に出たので馬車自体は余っている。クレアの上品な馬車はアシュレイのドレスに似合うだろう。

本日のアシュレイのドレスも昨日とは別のものだ。クレアが明日着る予定のドレスを黙って拝借したアシュレイの姿は誰が見ても文句なしに可憐だと言おうだろう。自画自賛出来てしまうほどの出来映えに満足を覚えながらアシュレイは身支度を終えて屋敷を出た。

道中、馬丁を務めている使用人からアシュレイは声をかけられた。

「お綺麗です、アシュレイお嬢様」

「あら、ありがとう。……貴方はブルック、だったかしら？」

「ブルックリンです。その……ヘザーお嬢様のことは、お気になさらず」

使用人一同は貴女様の味方です、と続けたブルックリンはそのまま前に向き直って馬車を進める。それを聞いたアシュレイはそっと懐からハンカチを取り出し、顔を隠した。

(日頃の対応の差ね。使用人達を味方に付けられるのは大きいわ)

感極まって泣き出したと勘違いしたブルックリンは焦ったが、アシュレイはそんなことを考えていた。これまで血の繋がった母と暮らしていたときのヒエラルキーの最下部はアシュレイだったが、今は違う。アシュレイはその事に幸福を感じていた。

ゆえにその幸福を続けるためにアシュレイはブルックリンに言葉をかける。

「ありがとう、ブルックリン。私、私……貴方のような人がいてくれて、幸せだわ」

「お嬢様……」

「でも、あまり無理をしないで。これからもよろしくお願いしますわ」
アシュレイのその言葉にブルックリンは感極まったようだった。背中を震わせて馬に鞭を打ち、馬車を舞踏会の行われる王宮へと進め

る。

そしてアシュレイは招待状を手に王宮のホールへと向かった。普通ならばエスコートを必要とする場面。だが、グランヴィル王子の花嫁探しの一面をもつ今回の舞踏会はむしろエスコートの男を連れてこないことを推奨されている。だからこそ婚約者も従兄弟もないアシュレイが堂々と入るのである。

それに、アシュレイはエスコートを必要としなくなっていた。何故なら彼女にはエスコートしてくれる男性が見つかったからだ。

「君は、昨日の……」

「……ぎげんよう、王子殿下」

アシュレイの姿に見惚れた茶髪の男性、この国で二番目に尊きお方グランヴィル王子が手を差し伸べている。アシュレイは気後れしているように見せつつもその腕を絡めた。

その瞬間周囲から送られる羨望と嫉妬の視線。

（ああ……平穏じゃないわ。でも、何かしら。これは……この、もやもやというかむずむずする気持ちは……？）

アシュレイは微かに身震いして王子に微笑みかけた。途端に王子の顔は赤らみ、照れているようにも見える。自分がこの可愛らしくも逞しい男を独占しているのだと思うと心が浮き立つようだった。

そこに水を差すように現れたのは手で黄色いドレスを握り締めた令嬢だ。

「王子殿下、恐れながら——きやああ!？」

その姿はまるで道化だった。腰のあたりで裂けたスカートがはらりと地面に落ち、次いで令嬢自身も地面へと腰を落とす。それは防衛本能だったのだろうが、世間一般的な令嬢にそのまま腰を落とせるわけがない。バランスを崩し、無様にパニエの中のドロワーズを晒してしまった令嬢はそのまま泣き出してしまった。

それを見てアシュレイは心のなかで冷たく毒づく。

（様を見なさい、ヘザー。みつともないのは貴女の方よ）

無論、それを表情に出すことはない。アシュレイはいかにもヘザーを心配していますという顔をしながら纏っていたシヨールを差し出

した。

「大丈夫ですか？」

その姿はあまりに惨めで滑稽で。ヘザーの身分の低さを知る令嬢が笑いを溢したのを切っ掛けに、密やかな笑いが波紋のように広がった。それに顔を真っ赤に染めたヘザーはアシュレイからシヨールを奪って丸め、アシュレイに叩きつけた。

「施しなんて！……この、恩知らずが！」

そう言い捨てたヘザーは取れたスカート部分を手で押さえ、その場から走り去ってしまった。勿論スカートは何度もずり落ち、その度に笑いを誘っていたがそんなことにヘザーが構えるような精神状態ではない。

アシュレイはひとしきり内心で笑ってから、王子に向き直った。

「あの方……大丈夫でしょうか」

「貴女は優しい人だな。……そんな優しい貴女、私と踊ってくれませんか？」

「……喜んで、王子殿下」

アシュレイは天使のような微笑みを浮かべ、王子の合図で始まった音楽に身を任せた。

幸せ狂の潜伏

舞踏会から戻ってきたアシュレイは、玄関の前でヘザーの襲撃に遭った。半狂乱になりながらアシュレイを殴り、踏みつけ、ドレスを引き裂くその様はまるで鬼女だ。アシュレイはその暴虐を死んだ目で受け止めた。

最早アシュレイに手を出したヘザーの結末は決まっていた。無論、死だ。どのように残酷に殺されるべきなのかアシュレイは考え始めた。たかが令嬢が振るう平手程度が痛いわけがない。アシュレイはもつと理不尽で苦痛に満ちた生活を送っていたのだから。

(その手はいらないわね。引き裂いてあげるわ)

冷静にそう考えているアシュレイは表情を取り繕うことはしていない。必要ないからだ。既に殺すと決めている女を前に取り繕ったところで何の意味もない。

(その足はいらないわね。切り落としてあげるわ)

ただ、それがヘザーの怒りを買うことになるのは当然のことだ。アシュレイの背の上で地団駄を踏みながら手近な物を投げようとしては使用人に止められるようになっていた。

(その目はいらないわね。えぐり出してあげるわ)

アシュレイがそんな恐ろしいことを考えていることなど知らないヘザーは地団駄を繰り返す。骨が軋む音がするが、今アシュレイがヘザーに逆らっても意味がないのだ。至上の苦痛を与えてから殺すのでなければアシュレイの気が済まない。

アシュレイの感情を理解していない怒れるヘザーを止められる人物は三人いる。しかし一人はようやく落ち着いてきたとはいえ残業で泊まり込み状態。もう一人は舞踏会を期に夫に自身を差し入れしに行っていて、帰ってくるのは明後日。では最後の一人はというと、その場から離れていた。

使用人は最後の一人を呼びに行ったが、それもどれだけ時間がかかるか分からない。

(もうしばらくは痛い目に遭ったままになりそうね。ああ、平穏で幸

せな日常つてどこに行つたのかしら)

現実逃避気味にそう考えているアシュレイに救いの手が差しのべられたのはそれから数分後のことだった。普段着に着替えたクレアが戻ってきたのだ。その光景を見るなりクレアはヘザーとアシュレイとの間に入り込んだ。

「おどきなさい、クレア！ その売女を殺せないじゃないのツ！」

「殺して全てを解決出来るなんてことはありませんわ、ヘザー姉様。落ち着きましょう？ ほら、こんな娘なんか放っておいてお部屋に行きましょう」

(こんな娘なんかつて何よ、クレア。貴女も私を蔑ろにするの?)

ヘザーの手から凶器に成り果てた傘立てを離させ、肩に手を置いてゆつくりと部屋へと誘導していくクレアら、彼女は使用人に何事かを命じるとアシュレイには一瞥もくれずにその場から立ち去つていった。

(何よ、クレアも私のことなんかどうでも良いんじゃない)

醒めた目で痛みに耐えながら体を起こしたアシュレイは、突然抱えあげられた。どうやら近くに駆けつけていたらしいブルックリンが運んでくれるようだ。

「アシュレイお嬢様、失礼致します」

抱えあげてからそう言ったブルックリンにアシュレイは苦笑しつつも身を預けた。痛いものには慣れているが、久しぶりの苦痛に身体が追い付いていないのだ。

取り敢えず手近に目についた侍女にアシュレイは弱々しく命じた。

「シヨーナ、湯浴みの準備を頼んでも？」

「も、勿論ですアシュレイお嬢様！ すぐに準備致しますね！」

侍女シヨーナは慌てて湯を用意しに駆けていった。彼女もまたアシュレイの信奉者ともいえる使用人で、アシュレイに良くしてくれる使用人だ。シヨーナならば確実に完璧に用意してくれるだろう。

ブルックリンに抱えられながらアシュレイは自室へと戻り、シヨーナの介助を受けながら湯浴みを行う。打ち身にはあまりよくないが、傷口があるかどうか確認するのも重要なことだ。無知だったころの

アシユレイは傷口が膿むまで放置して痛い目に遭ったのだから。

幸いなことに身体中のどこにも傷口はなかったので、打ち身を冷やしながらアシユレイは明日の準備に励んだ。カレラス男爵邸に残された舞踏会に使えるドレスはあと一着。そのセンスはアシユレイからすれば最悪で、無理に着ても似合うものですらない。

(どうしようかしら。行ってもまた殴られるなら……行っただって、無駄だし)

アシユレイにしては珍しく悩む姿に、シヨーナがその場から駆け出していった。妙にそそっかしいところがブルツクリンに似ていてアシユレイは少し笑ってしまう。

しかし、それに笑えたところでドレスがないのも事実。アシユレイは知らぬことであつたが、義母ナターシャはアシユレイのためのドレスなど一着も用意していなかったのだ。舞踏会に一度も着ていったことのないドレスなど、カレラス男爵邸にはない。

(もう見たことのない世界は見たわ。もう……良い、かなあ)

もう良い、と断言できないのは何故なのか、アシユレイには分かっている。ただそれを断言したくない何かがある、というただそれだけのことでアシユレイは迷っていた。

しかし、それを解決してくれる存在がいた。それは先ほど駆け出していったシヨーナだ。彼女はその手に一着のドレスを持っていたのだ。それは折り畳まれていても分かる上質なもの。純白のドレスだ。アシユレイの記憶が刺激され、そのドレスが何のためのものだったのかを思い出す。

「シヨーナ、これは」

「ナターシャ様のものです。それを、差し出がましいかとは思いましたが使用人一同でアシユレイお嬢様のために仕立て直しました」

そんな勝手なことをして大丈夫なのか、というアシユレイの思いは広げられたドレスを見て吹き飛んだ。最初からはなかった、ふんだんにあしらわれたレース。恐らくは使用人達が端切れとして買い集めたものだろう。それをうまく組み合わせる違和感のないものに仕上げている。

もともとはシンプルな一品だ。首の後ろでリボン結び、右腰にもアクセントとしてシフォンのリボン結び、ただそれだけのもの。ナターシャがカレラス男爵ローランドと結婚するときに着ていた婚礼衣装。

だが、今は違う。首の後ろで結ばれるリボンには薄く百合の刺繍が施され、更にレースが付け加えられて歩き回れば人々の視線を集めるだろう。胸元にも同様の刺繍があり、絡み付くように裾まで覆っている。その刺繍と調和するようにレースも裾まで絡み付いていて、豪華さを強調している。腰のリボンは取り外され、繊細なレースをリボン代わりに巻く形に変えられていた。

(これは……何というか)

凄くアシユレイに似合いそうだった。自分でも分かるくらいなのだから、恐らく着れば素晴らしく映えるだろう。最早ナターシャには似合わない。このドレスはアシユレイのものだった。

「アシユレイお嬢様のために、アシユレイお嬢様のことだけを考えて作りました」

お気に召しませんでしょうか、と思い詰めたように聞くシヨーナに、アシユレイは感極まりながら答えた。

「召さないわけがないわ、シヨーナ。これは……素晴らしい」

アシユレイはそう言ってシヨーナの手からドレスを受け取った。明日も舞踏会。それに来ていくには相応しい、これ以上ないものだ。これに薄手の手袋をつければ完璧だろう。

アシユレイは心が浮き立つのを感じながら明日に備えて眠りにつくのだった。

幸せ狂の自覚

(これが、恋なの?)

アシユレイは困惑しながら周囲の声を聞いた。どちらも互いに想い合っていて、お似合いだと。そういう声で溢れていたからだ。アシユレイにはこの浮き立つ気持ちが恋だとは思えなかった。胸を締め付けられるような苦しみも、今が確かに幸福だから終わる可能性の高いこの状況に寂寥感を覚えているだけに違いないと。

(この、苦しいのが。寂しいのが恋だというの?)

それがあり得てはいけない感情だと、さすがのアシユレイも弁えていた。しかし、幸せになるためには嫉妬や羨望などもつての他だったはずのアシユレイが、自信がここに理由がそれ以外に見つからない。

この場においてアシユレイがカレラス男爵家の人間であることを知っているのはクレアだけ。ヘザーは欠席していて、クレアは曖昧に笑っているだけであるから実質どこの馬の骨なのかすら誰も把握していない。何故かクレアは似合わない派手な黄色いドレスを着ている、アシユレイの方を見向きもしなかったがその理由はアシユレイには分からない。

だが、アシユレイにとっては都合が良い。誰にも知られていないということは、忘れられやすいということだ。まず身分が違いすぎる。この国において貴族は六つの家格に分けられている。公爵、侯爵、辺境伯、伯爵、子爵、男爵である。そのうち男爵家は見ても通り最下位。将来王妃になるのであれば最低でも辺境伯か侯爵位にはあるべきだ。男爵令嬢アシユレイは全く相応しくない。

(だから、たとえこれが恋だとしても叶えちゃいけない。願っちゃいけないのよ)

だからこそ王子のこの問いにもアシユレイは答えられないのだ。

「君は不思議な姫だね。せめて名前だけでも……教えてはくれないだろうか」

その言葉にアシユレイは胸を締め付けられるような思いをした。

知られてはならないのだ。王子と結ばれる未来などあり得ないと分かっているから。確かに王子と結ばればより幸せになれるだろう。だが、男爵令嬢には無理だ。

(そうよ。誰かを殺してもこの場所には絶対に立てない)

だからアシュレイは泣きそうな顔で王子にこう答えた。

「私は……本当は、貴方に相応しい姫君などではないのです。叶わない夢を見ているようなもの。どうか、この夢が覚めないように名前は呼ばないで下さいませ」

そう言つて顔を伏せるアシュレイに王子は問いを重ねることは出来なかった。それほどに庇護欲をそその姿だったのだ。ただし王子は内心で身分の低い家の令嬢とアシュレイとを照合する作業に入っていた。こんな令嬢がいれば絶対に覚えているはずだと。

勿論この王子の思考は全くの無駄だ。何故ならアシュレイはまだ一度も王子と会ったことがない。舞踏会に出たのもこれが初めてだ。目の前の女と、まだデビューもしていない男爵令嬢など結び付くわけもないし、結びつけられても困る。

だからこそアシュレイは自分のことを知られたくなくて淡く微笑んだ。

「殿下。私に……夢を。今夜限りの夢を見せて下さいませんか？」

「……私は……諦めない。君を諦めはしないから」

低くそう呟いた王子に手を握られ、音楽が始まる。そのリズムに乗ってアシュレイは踊った。

(この曲が最後よ。これで、終われば、平穩に……戻るの)

王子の手を握る力が強くなるが、アシュレイはそれに気付けない。自分のことだというのに制御しきれない気持ちだが、王子の手にすがり形で表れていることなど認識できていないのだ。

曲の終わりまで聞いたアシュレイは、即座に王子の手を振りほどいて逃げ出した。

「ま、待ってくれー」

王子の叫びもアシュレイを止めることはできない。残されているのは王子が必死に掴んだアシュレイの嵌めていた手袋のみ。精緻な

刺繍がされたそれが、市販のものではないことをアシユレイだけが知らなかった。

そして、そこに使用人達が『アシユレイⅡブランチ・ウィーターⅡカレラス』という彼女の本名を飾り文字の刺繍で記していることも。幸せを求めるアシユレイにとつての唯一の誤算は、即物的なことを求めるあまり令嬢としての嗜みをさわり程度にしか学ばなかったことだ。学んでいれば、後々面倒なことを運ぶだろう手袋を残していくことはなかっただろう。

そう。アシユレイは飾り文字が読めなかったのだ。

勿論、使用人達もアシユレイがその文字を読めないことを知っている。だからこそ手口に目立たないように刺繍していた。出来るだけ小さく、じっくり見なければ分かる人にすら読めないようにしてあったのである。

そして、王子がそれに気づかないわけがない。本来であれば使用人達が誰のものか間違わないための目印だったものは、王子と踊った姫へと導く標となる。

王子は知らない。これが、殺戮の始まりになることなど。

幸せ狂の殺人1

アシュレイの手袋から『カレラス』の名のみを読み取った王子は、親衛隊を連れてカレラス男爵邸に押し掛けていた。無論王宮で缶詰状態になっていたカレラス男爵は大慌てで体裁を整えなくてはならなかったために帰宅を余儀なくされている。

カレラス男爵が自分の娘を一人ずつ王子の前に差し出すために準備を整え、使用人に長姉ヘザーを呼びに行かせたが出てこない。

王子を待たせているというのもあるが、何度も何度も呼んでも返事がないという答えしかしない使用人に男爵は業を煮やした。

「どういふことだ、シヨーナ！」

その男爵の剣幕に怒鳴られた使用人シヨーナは怯えることしか出来ない。

「わ、わたしには何も……っ！ と、とにかくお部屋にはいらつしやいますし、お召し変えも終わっているはずなのですが……」

それでも返事をしようとしないうヘザーに、王子の堪忍袋の緒も切れてしまった。

「ならば押し掛ける。案内せよ、男爵」

高貴な人物らしからぬ王子の言葉に男爵は渋ったものの、断れば文字どおり首が飛ぶので案内せざるを得なかった。まだ男爵も死にたくはなかったのである。

しかし、ヘザーの部屋の前に立ちはだかる女性がいた。彼女は静かにその場に佇んでいたが、王子を見ると決意を感じさせる瞳で彼を見据えた。

王子は眉を寄せてその不遜な女性に命じる。

「どけ、娘」

「いいえ。首をはねられようがわたくしはここを退くつもりはありません」

それはクレアだった。何者にも揺らがぬ決然とした瞳で、王子の顔をしっかりと見ながらそこを動こうとはしない。それは親衛隊が剣を抜いても変わらなかった。クレアはクレアなりに姉を守ろうとし

たのである。そのなかで、守ろうとしている姉が何をしているのかも知らずに。

王子は苛立ちとともにクレアに詰め寄り、問うた。

「貴様がそこを退かないのは嫉妬からか？」

「いいえ。殿下が姉に会う必要は一欠片もございませんので。どうぞわたくしどもに構わずもう一人の妹とお会いになつては？」

それは事実だった。舞踏会で恥をかいたヘザーが王子に会う必要などどこにもない。クレアも同様だ。王子とは何の関係もない。いずれ嫁ぐ可能性のあつた男性に縁を切られたのはクレアも同じ。今カレラス男爵家と関係を持ちたい人物は一人もいないのだ。それ故にクレアは王子のためにもここを通したくなかつた。

しかし、それが通じないのが恋に盲目になつた王子である。蔑むようにクレアに告げた。

「あくまでも邪魔をするつもりか。容姿に似合わず醜い女だな」

「どうとでも仰ってくださいませ。わたくしは名誉さえこれ以上汚されなければ十分ですから」

クレアのその発言は、最後まで言い切ることはできなかつた。何故ならヘザーの部屋の中から悲鳴が聞こえたからだ。

『きやあああああああつ！』

聞くものの魂まで削りそうな、悲痛な叫びに王子の頭は沸騰した。この中にいるであろう想い人が目の前の女の時間稼ぎによって害されている。そう考えてしまったからだ。それが事実であるとは限らないが、少なくとも王子のなかではそうなつた。

だからこそ王子は、血相を変えて部屋に飛び込もうとするクレアを親衛隊に拘束させてそこに飛び込んだ。部屋に鍵はかかつていない。しかし、部屋の中の様子はそこに誰かが闖入してくることを拒んでいた。

そこには、赤があつた。

夥しく流れ落ちる赤。その根源を恐る恐る見た王子は絶句した。恐らくはネグリジエなのだろうその服が、血に濡れている。どこから流れ出たものなのかと確かめるとそこには恐らく顔があつたはずで。

ぽっかりと二つの穴が開いた面が、ゆっくりと崩れ落ちる。

その傾いだ体を支えるはずの腕は既になく、ただ流れるように床に向けて倒れ込んで。

「へザー姉様ツツツッ！」

親衛隊の拘束を解けないままにもがくクレアが叫んだ。その呼称に、その血だるまの人形が男爵令嬢へザー・カレラスであることを王子は知った。

「へザーっ！ ああ、へザー……」

血溜まりに近づいたカレラス男爵が娘だったものを抱き起こし、涙を流した。クレアもそれがへザーであるとカレラス男爵が認識した時点で崩れ落ちていた。王子はその女性があのとときの姫であるかどうかを確かめようとして、出来なかった。ソレはあまりに血にまみれていて、顔の形すら認識出来なかったのだ。

カレラス男爵は涙が枯れると、下手人の姿を探した。まだそこにいるとは限らない上にむしろもう逃げているだろう状況だが、それでも。無論下手人の姿はない。当然だ。へザーを殺した人物は、その場に倒れ伏しているのだから。

へザーが死んだ原因は確かにとある人物に関係ある。だが、彼女はへザーを死に至らしめただけで直接手を下したわけではなかった。

そう。誰も理解しようとは思わないだろうが、へザーは自分で生きるのをやめたのだ。

幸せ狂の求婚

無惨に死んだヘザーの葬式が終わるまで、王子は一切カレラス男爵邸に近付くことを王から禁じられた。死の穢れに触れたからでもあり、ヘザーに危害を加えた下手人が分かっていないからでもある。グランヴィルの他に子供のいない国王夫妻にとって、彼は代えの効かない後継者でもあるからだ。

ヘザーは丁重に弔われたが、弔われたその日から彼女の墓は荒れた。理由は分からないが、目を離れた隙にすぐに荒らされるのである。荒らした人物が名乗り出ることはなく、何をしても荒れてしまうのでナターシャは放置を決めた。実の娘の墓ではあるが、家名を汚した娘の墓でもあるからだ。下手に手を出してヘザーの汚名をカレラス男爵家の汚名にすることはないと判断したのである。

そしてヘザーの忌日が終わった頃に王子は再びカレラス男爵邸を訪れた。クレアではない、もう一人の娘に会うために。今度はクレアも邪魔をすることはなかった。蟄居を命じられていたからではなく、アシュレイに関わる意味がなかったからだ。

アシュレイは自室でそれを待っていた。唐突なシヨーナの訪問と着替え、それに化粧をされたあたりで察しはつく。誰かがアシュレイを訪ねてくるのなら、それは王子以外に有り得ないのだ。アシュレイは他に友人もいないのだから。

（これが現状を打破するための切欠になるかどうかは殿下の本気次第ね）

そう考えながらアシュレイはただ静かに彼を待った。

そして。部屋の扉が叩かれ、外から声がかけられた。シヨーナだ。

「アシュレイお嬢様」

「どうぞ」

シヨーナの声にアシュレイはそう返答した。心臓が痛いくらいに収縮を繰り返している。無意識にアシュレイは胸の前で手を握り、胸の鼓動を押さえようとしたが無駄だ。期待に膨らんだ胸を萎ませるためには、絶望を見せつけられるしかないのだから。緊張して待つア

シユレイには、ゆつくりと扉が開けられるのが永劫にも思えた。

(早く……早く、早く！ 殿下……！)

こう思えるということは、やはり自分は王子に恋をしているのだろうか。そう思いつつアシユレイは入ってきた人物と正対した。

そして優雅に礼を取る。

「ようこそカレラス邸へおいでくださいました、グランヴィル王子殿下。カレラス男爵が三女アシユレイと申します。お会いできて光栄ですわ」

「貴女は……ようやく、ようやく会えた……！」

形式通りに挨拶をしたアシユレイに対し、王子は彼女を抱き締めるといふ行為で応えた。抱き締められた瞬間、アシユレイは真っ赤になった。

(ああ……！ 殿下だわ……！ あのとときと同じ、なんて温かい……これが、幸せなんだわ……！)

アシユレイはそう悟った。王子と共にあること。それこそがアシユレイにとつての幸せなのだと思つたのである。それを理解したアシユレイの行動は簡潔だ。この幸せを、どんな手を使つても手放さないようにする。たとえ誰を殺したのだとしても。

そして、それは王子も同じだったようにアシユレイには感じられた。どんな手を使つても、アシユレイを手放さないようにしたいのだと。その日一日の逢瀬を楽しんだ王子は王宮に戻ると早速アシユレイとの婚礼を実現すべく奔走し始めたのである。

ある日珍しくアシユレイの起きている時間に帰宅できたカレラス男爵は一枚の羊皮紙をナターシャに見せていた。アシユレイにはその内容がどんなものなのか分からなかったが、その日から使用人が増えてお妃教育が始まることになった。

その他にも、カレラス男爵を陞爵したり等かなり精力的に動いていたようだ。王子の働きかけにより、カレラス男爵はカレラス辺境伯となったのである。無論これはアシユレイが嫁ぐためだけに相応しい爵位にまで引き上げたただけだ。領地も革命の影響により増えることはない。

アシユレイは厳しいお妃教育に耐えながらその日を待った。すぐに王子が迎えに来てくれるのだと。そうすれば幸せになれるのだと。そしてその日はやってきた。アシユレイにとっては待ちわびた瞬間。諦めていた夢が叶う瞬間はドラマティックに演出された。完璧な正装に身を包むグランヴィル王子。侍女のお仕着せを脱がされ、一番似合うドレスに着替えさせられて美しく化粧をされたアシユレイ。

そして、跪く王子は口上を述べた。

「美しい姫、カレラス辺境伯が三女アシユレイ嬢ブランチよ。どうか私の妻になってください」

「……凛々しいお方、いずれこの国で至尊のお方となられるグランヴィル王子殿下。私が貴方に相応しい妃となれるのなら、喜んで」

「勿論だ、アシユレイ。私の愛する人！」

そう言つて王子はアシユレイをきつく抱き締めた。それだけでアシユレイは幸せな気持ちになれた。

そうして、アシユレイは国内で一番に幸せになった。

幸せ狂の戦慄

夢のような結婚式が終わり、アシュレイは王太子妃として生活を始めた。輿入れに際して王宮に侍女を連れてこられたのは一人だけだ。ただ、たつた一人であつたとしてもアシュレイの信奉者であることは事実である。シヨーナのおかげで、アシュレイはさほど苦勞もせず王宮に馴染みつつあつた。

王子も優しい上に、国王夫妻も何かとアシュレイを気にかけてくれる。まるで本当の両親のようだと、と思いつつもアシュレイは幸福を貪っている。やらなければならないことはあるが、それ以上に誰からも害されない生活はアシュレイにとって幸福であつた。

そもそも王宮でアシュレイが気を付けるべきは礼儀作法であつた。しかし元々、母に叱られる口実を減らすために令嬢としてのたしなみを死に物狂いでやっていたアシュレイにとって、王宮の作法を覚えることはさほど難しいことではない。誰からも嫌がらせを受けることなく、アシュレイは平穩に過ごしていた。

ただ、アシュレイの生活に暗い影を落としている存在があつた。それはことあるごとにアシュレイを悩ませ、本日もその事で頭を悩ませている。

(問題は、クレアとナターシャよね)

ヘザーが死んで以来、クレアは抜け殻のようになってしまったようだ。結婚式の時も参列はしたが誰とも話さず、ただぼんやりと中空を見詰めていただけだったので、想像もつく。だが、いつ正気に戻るかわからない。アシュレイの罪を知る人物は消さねばならないのだ。そういう意味で、彼女らはアシュレイにとっての悩みの種なのである。

(何か良いアイデアがあれば良いのに……)

溜め息を吐いたアシュレイはカップを傾けて紅茶を流し込んだ。これから家族が面会に来るので憂鬱なのだ。しかも彼らはアシュレイを『妃殿下』もしくは『王太子妃殿下』と呼ぶ。家に帰りたいわけではないが何となく嫌だつた。

それでも勿論時間は過ぎる。対外的にも行事として公開されているお茶会という名の面会は、薔薇庭園で行われることになっていた。カレラス辺境伯家とアシュレイ、そして王子の全員がそこに用意されている席について、さあお茶会を始めようとしたその瞬間。

「赤……」

ぽつり、とクレアが呟いた。アシュレイは眉をひそめて周囲をさりげなく見回したが、特にクレアが気にしそうな赤い何かは見つからない。強いて言うのなら、この薔薇庭園の薔薇は素晴らしく深い紅の色をしているくらいか。まるで血のように赤い薔薇だ。

アシュレイは一体どういうことだろう、と思いつつ口を開いた。

「お久し振りですわ、お父様、お義母様、お義姉様」

「お久し振りですな、アシュレイ妃殿下。お元氣そうで何よりです」

家族を代表してカレラス辺境伯がそう答えたが、クレアの瞳は定まらない。気が狂っているだけなのか何なのかは分からないが、ただ中空を見つめて何かを待っているかのようだ。

(注意した方が良さそうね)

そんなクレアの様子を見たアシュレイは冷静にそう判断した。しかし、アシュレイが注意するのは自身の安全と平穏を乱さないかどうか、ただそれだけだ。それではクレアの目的など分かるはずがなかった。

そう。全てを崩壊させんとするクレアの目的など。

位置関係が悪かった。結果的に言えばそういうことだ。誰も、それを止めることは出来なかった。誰も考えていなかったのだ。姉を喪ったクレアが、どんな精神状態に陥っているのかを。

アシュレイも最初、クレアが何と言ったのか理解できなかったのだ。彼女に反応できたのはたった一人。王子だけだ。それも彼女の言葉に反応したわけではない。その後の行動に反応せざるを得なかっただけだ。

クレアは平坦な声で告げた。

「わたくし達は皆、同じ穴の貉なの。アシュレイも、わたくしも、お母様も、お義父様も。皆、人殺しなの。わたくしはほら、今人殺しにな

れたでしよう？」

首をかしげ、手元のフォークを王子に向けて投げつけたクレアは、それが弾き飛ばされたのを見てティーカップを手に取った。どうやらそれも投げようとしているようだ、と呆然とアシュレイは判断する。

しかしそれを投げるには至らなかった。

「衛兵！ 彼女を捕らえろ！」

王子の声に忠実に反応した衛兵がクレアの手からティーカップを奪い取り、右手を後ろに捻ってテーブルに押し付けた。押さえ付けられているクレアはしかし、苦悶の声すら漏らさず項垂れている。

（今、今、何が……？ 今何をしたの、クレア？）

アシュレイは混乱の極みに叩き込まれていた。カレラス辺境伯も、ナターシャも同じだ。この中で今の状況を理解していたのは下手人たるクレアのみ。

望んで作り出した破滅の状況を、このまま破壊されてたまるものかと項垂れたままクレアは血を吐くような声で言葉を叩きつける。

「皆、死んでしまえば良い！ アシュレイがブランチ様を殺したように！ アシュレイが姉様を追い詰めて死なせたように！ 皆、皆、死んでしまえば良いのよ！」

場が凍りついた。たとえそれが事実なのだとしても、事実ではなかったのだとしても、どちらにせよ致命的な言葉だ。クレアにとっても、アシュレイにとっても。

この時点でクレアは王族を侮辱した罪と王族に対する殺害予告で極刑が決まった。

幸せ狂の殺人2

薄暗い牢の中で、柵を隔ててアシユレイはクレアと向き合っていた。クレアは感情の抜け落ちた瞳でアシユレイを見つめ、視線を離すことはない。既に処刑間近で、服装は取り繕われることすらない汚れたドレスのままだ。それでもまだ気高く見えるのはその顔立ちが凛々しいものであるからか。

もつとも、アシユレイもアシユレイで侍女のお仕着せを着て変装しているのみすばらしいのは同じである。どんな格好であれ、アシユレイはクレアがまともに自分を見られないと思っていたので意外だった。

しかし、問わなくてはならないことは聞いておかなければならない。アシユレイはクレアに問いかけた。

「どうして……あんなことを？」

(本当に、どうして。クレアはヘザーよりもまともだと思っていたのに)

その疑問にクレアは目を細めた。それは責められているようにアシユレイには見えて、実際にクレアはアシユレイを責めようとしていた。当然だろう。人殺しに根本から同情するものはいない。同情しているように見えてもそこには優越感が見え隠れするものだ。

クレアは吐き捨てるようにアシユレイに問いを返した。

「それはわたくしのせりふよ、アシユレイ。どうして姉様の目を抉ったの」

(何、ですって?)

それはアシユレイにとって青天の霹靂の問いだった。まさかクレアが察しているとは思わなかったのだ。確かにアシユレイは自身の幸せのためにヘザーの目を抉った。彼女が最早省みられる人物でなくなるように。結果的に死んでくれたのは誤算ではあったが。

無論それをクレアに伝えることはできない。そんなことをしてもアシユレイは幸せになれないのだから。アシユレイは、幸せになるためならば何でも出来る。無論義姉を見捨てることすら。

だが、クレアは沈黙を赦しはしない。

「もう分かっているのよ。貴女が自分のためにヘザー姉様を、ブランチ様を殺したのは」

「……人間きが悪いですわ、クレア。私がヘザーごときにこの手を汚すような真似をすと思うって?」

「するわ。貴女は自分が楽になるなら何でも出来る人だもの」

皮肉なことに、この先共に過ごす王子よりもこのまま処刑されるクレアの方がアシュレイを理解していた。もつとも、王子がアシュレイの本性を知ってまだ愛してくれるとは限らないが。

アシュレイはこれ以上話をしては危険だと思い、強引に話を終わらせようとする。

「処刑は明日行われますわ、クレア。それまで殿下を狙ったことを悔いるのね」

「悔いることなどないわ。わたくしは、何一つ失敗することなくやり遂げた。その代償がわたくしの命で済むのなら安いものよ」

クレアの言葉にアシュレイは不安を覚えたが、クレアが何を成し遂げたのかは理解できなかった。それが致命的な事態を招くことを、アシュレイは知らない。

(何よ……一体、クレアは何をしたって言うの!?)

理解できないものを、アシュレイは勿論そのままにはしなかった。こういうときに口を割らせる方法をアシュレイは一つしか知らない。

袖口から取り出した食事用のナイフを柵の隙間から差し入れ、クレアの瞳の前で止める。そして問うた。

「何を、やり遂げたの?」

「貴女には一生理解できないことよ。説明する意味もないわ」

クレアはそのナイフを見てはいなかった。ただまっすぐにアシュレイの瞳を見つめていて、離そうとすらしない。クレアの絶対の意思は、刃物程度では揺らがないのである。

それに対するアシュレイの行動は簡潔だ。アシュレイはナイフを突きだし、それが脅しではないことを実証する。逃げなかったクレアの右目にナイフが突き刺さり、血が溢れ出す。

それを引き抜きながら、アシユレイはクレアを脅した。

「意味がなくとも知ることは重要よ」

「……知った、って……もう、遅いわ……もう……手遅れ、なのよ……
貴女は……貴女はっ……幸せになど、なれない……！」

幸せになれない、というそのフレーズを聞いた瞬間、アシユレイは無意識にクレアに向けてナイフを突きだしていた。そのナイフはクレアの左目を抉り、胸を、腹を、頬を次々と抉っていく。

「あ、ああああ……うああああ！」

獣のような咆哮をあげながら、アシユレイはナイフを振るった。

（認められない認めたくない認めてはならない！ 私が幸せになれないなんて嘘！ 私はこうやって幸せをつかんだの！ こうしないといけない！ 誰かを殺さないで、私は、私は、幸せになれないんだから！）

クレアの言葉を否定するためだけに振るわれるナイフに、クレアは真っ向から立ち向かう。最初から生きて帰る気のないクレアは、どんな痛みにも屈することはない。ただアシユレイを否定すべく声をあげる。

「……姉様の、幸せを……奪った貴女が！ つ、幸せに、なんて！ なれる……はずが、ない！」

「うるさい……うるさいっ！ 黙りなさい！」

「……ブランチ、様の……姉様の……幸せを、奪った貴女が……その分まで、幸せになんて！ なれるはずがないっ！」

その命を賭けたクレアの叫びは、アシユレイの心に的確に突き刺さった。しかしアシユレイはそれを認めない。認めてしまえば、アシユレイは二度と幸せにはなれないからだ。

「……黙れ……黙れ、黙れ、黙れえええっ！」

「黙る、もの……かつ！ ……人を、殺し、た……報い……を……受け……るが……良い……！ ……貴女、は、永遠に……幸せ、に……な、ど……なれ……な、いッ！」

「死ぬ……死ぬ！ お前なんて、私の幸せになんかいらないッ！ 無様に泣き叫んで死ぬええええッ！」

しかし、クレアはそれ以降泣きも叫びもしなかった。苦痛に悶える声をも殺し、ただアシュレイを見据えてそのナイフを受け入れる。

「はあっ……はあ、はあっ……はは……」

アシュレイが息を切らす頃には、既にクレアは動かなくなっていた。それは、久方ぶりの感覚。

あの時母を殺したときと同じ、奇妙な爽快感だった。

幸せ狂の殺人3

国王夫婦は退位し、グランヴィル王子は戴冠してグランヴィル一世となった。アシュレイもそれに即してアシュレイ王妃と呼ばれるようになり、ますます忙しくも幸せな日を過ごす二人。姫ではあったものの子宝に恵まれた二人の幸せはいやますばかりと思われた。

しかし、幸せのために殺人に囚われたアシュレイには物足りない日々だったのだ。

そんな中ひっそりとクレアが処刑され、連座で処刑されるはずだったカレラス辺境伯とナターシャはアシュレイの温情により領地から一生出ないよう身を慎んでいることで命を救われた。無論、カレラス辺境伯もナターシャも死にたいわけではなかったので禁足を破るわけがない。だからこそ世の中の情勢を知ることができず、辺境伯家存続の危機に見舞われたのである。

それはある雨の日だった。

「カレラス辺境伯夫人ナターシャ・クラシア、グランヴィル王子が長女フローラ姫の毒殺容疑で逮捕する！ 大人しく自らの罪を認め、縛につくが良い！」

憤怒の表情で現れたグランヴィル一世にカレラス辺境伯は驚愕した。慌てて何かの間違いだと言張するが、残念ながら愛で塞がれたグランヴィル一世の耳には聞こえない。そしてそのままナターシャは捕縛された。

ナターシャのいわれなき罪状は王族の毒殺未遂。その王族の名は彼女が聞いたことのないもので、無論禁足を破っていないナターシャには不可能なことだ。だというのにナターシャはいわれなき罪で拷問の憂き目に遭っていた。

「大人しく自らの罪を認めた方が楽だぞ、ナターシャ夫人！」

「ですから、何も知らないのです！ アシュレイ王妃に姫がいたことすら知らないのに、どうして存在も知らない人物に毒など送りつけられましょうか！」

「嘘を吐くな！ 貴様の娘の自業自得を逆恨みして王妃殿下と王女殿

下を害そうとしたのだろうか！」

そこにはナターシャの味方など誰もいない。カレラス辺境伯も弁護することすら赦されず、ただ領地に軟禁されることしか出来なかった。抵抗に意味はない。だからこそカレラス辺境伯は血の涙を流しながらナターシャの帰りを待った。

勿論、王族に手を出した罪は重い。クレアがそうだったように、ナターシャもまた解放されることはあり得ないのだ。獄死しても誰も同情しないし、真相を究明する人もいない。

そうなれば当然出てくるのは、人殺しに狂い、獲物を求めているアシユレイである。むしろ出張っていけるように仕向けたのはアシユレイの方であり、フローラの毒殺未遂など、ナターシャを殺すための口実ではない。

アシユレイは口角を上げながらクレアと同じ牢に入ったナターシャと向き合った。

「気分はいかが？ ナターシャ」

「今最悪になったわ、アシユレイ。こうして来るということは、わたくしは貴女に嵌められたのね」

自嘲するようにそう笑ったナターシャは、アシユレイをも蔑むような顔で彼女の顔を見つめた。

(何よ、私だけが悪いみたい。悪いのは私じゃなく皆よ)

アシユレイは心の中でそう毒づく、懐から扱いやすい短剣を取り出した。グランヴィル一世から持たされた護身用のものだが、その刃は刃引かれてなどいない。他人をより効率的に害することが出来る実戦的なものだ。

それを見たナターシャは眉をひそめた。

「……何のつもり？」

「あら、分かりませんか？ ナターシャだって、お母様を殺したがついてたのに」

「……は？」

くすくすと笑うアシユレイに、ナターシャは理解できないものを見たかのような顔をした。自分がブランチを殺したかったから何だと

いうのか。そもそも断じてナターシャはブランチに直接手を下したかったわけではない。

ただ、いなくなってくればとは思った。ずっとローランド・カレラスを恋い慕っていたのに、ブランチ・ウィーターに奪われたときの悔しさ。それならずと心の中だけでローランドを慕っていたように思ったのに無理やり自身を襲い、手籠めにしてまんまと夫に収まったヒース・クラシアへの憎しみ。呆気なく事故で死んだヒースを嘲笑しながら、ローランドを諦められなかった未練。それらすべてが、ナターシャにアシュレイを手助けさせた。

アシュレイが実母ブランチを殺せたのは、ナターシャが毒を提供したからだ。確かにナターシャにはブランチに殺意があった。だが、だからといってアシュレイが自分に短剣を向けている意味が分かるわけではない。

ただ、それをアシュレイが鑑みるかと言われるとまた別の話だ。

「せいぜい良い声で鳴いてくださいね？ ナターシャ」

狂った笑みを浮かべ、アシュレイはナイフを振るった。ナターシャが覚えてるのはそれだけだ。それ以降に起きたことは最早記憶にすら残らない。何故なら、ナターシャはそのまま殺されたのだから。

重罪人ナターシャ・クラシアⅡカレラスは、自らの罪を悔いて牢の中で自裁したことになった。事実を知るものはたった一人。ナターシャを手に掛けたアシュレイだけだった。

幸せ狂の誤算

アシユレイは、生家を棄てさせられた。当然だろう。義姉達や義母が悪名を撒き散らしたり犯罪者として処刑されたりすれば、カレラス辺境伯も無事ではいられない。カレラス辺境伯は自裁を命じられ、全ての権限を国に返還した上で自ら掘った穴の上で油を被り、死んだ。そしてその後、アシユレイはカレラスの名を名乗ることを禁じられ、今に至る。

(……私は、あの家にはもう帰れない。帰るつもりはなかったけど、帰らないのと帰れないのとはやっぱり違うのね)

寂寥感に囚われていたアシユレイだったが、数日でそんなものからは解放された。もつとも、悪い方向にだが。アシユレイは理解していなかったのだ。

誰も、家からは縁を切れないのだということ。

たとえ縁を切ろうが物理的に離れようが精神的に嫌い合おうが関係ない。ただ、家族であったことを知っている人がいる限り。家族の罪は自分の罪とみなされることの方が多いのだ。ゆえにアシユレイにもけじめを求める貴族が多かったのである。

そうしてアシユレイを引きずり下ろすために調査が入り、カレラス辺境伯邸は徹底的に調査された。するとアシユレイの部屋から遺体の一部や血痕など、出るわ出るわおぞましいものの群れ。もつとも、アシユレイ本人がそんな証拠を残すわけもないのだが、調査隊が問題である。

カレラス辺境伯邸に調査に入ったのは、皆アシユレイに反感を持つものばかりだったのだ。当然彼らも貴族で、平民などどうでも良いと思っているものばかり。証拠を捏造するために邸の使用人たちを皆殺しにすることなど造作もないものたちばかりだった。

そうしてアシユレイに忠実な使用人たちを喪い、残されたシヨーナもアシユレイに疑問を覚えはじめた。アシユレイはそのまま孤立した。

そうなればあとはもう目に見えている。

「お下がりなさい。私を誰だと思っっているのですか！」

「構うな！ 殺人王妃に遠慮する必要はない！」

「なっ……!?!」

アシュレイは反駁しようとして、出来ない。雪崩れ込んできた兵士たちは手練れで、すぐさま口に布を噛まされてしまったからだ。あまりの事態に呆然としている娘フローラに視線を向けるが、兵士達が邪魔で見えない。

しかし声だけは聞こえた。

「あなた方がどういったおつもりでお母様を拘束なさるのか、わたしには分かりません。ですが、そこまで手荒になさらなくてもよろしいではありませんこと？」

それは反駁ですらなかった。フローラの声は妙に冷たく、かつアシュレイを氣遣うものですらない。体面を取り繕うためだけのその言葉に、アシュレイは総毛立った。

フローラの言葉に兵士の一人が答える。

「姫殿下、妃殿下は危険なのです」

「危険？ そんなことはとうに承知しておりますわ。わたくしが誰のせいで死にかけたとお思い？」

(フローラ？ 貴女、何を言っ……)

アシュレイの困惑に、フローラは淡々と言葉を続けることで答えた。

「何度言われたと思うのかしら？ 『お可哀想なフローラ様』『祖母上に毒を盛られるなんて気の毒に』……その女が全てを企み、実行したからわたくしは今も微妙な立場に置かれているというのに、なぜわたくしがアシュレイ王妃の危険性を理解できていないとお思いになるのか、うかがってみたいですよわ」

「フローラッ！」

冷笑を浮かべているであろうフローラに、アシュレイはもがいて口布をずらすと、怒号をあげた。しかしフローラは怯んだ様子もなくアシュレイに言葉を叩きつける。

「わたくし、知っ……て……よ？ アシュレイ王妃。わたくしに毒を盛っ

たのはあなただと。そして、その罪をおばあ様に着せたことも。おばあ様を、あなたが！ 殺したこともっ！」

「解毒剤を用意して貰いながら、よくもそんなことを口に出来たわね、フローラ！」

「あら、アシュレイ王妃。世の中には毒など溢れ返っていますわ。その中で、わたくしが死ぬ前に的確に効く解毒剤を用意するのは本来不可能ですよ。事前に盛られた毒の名を知っていなければね！」

アシュレイの言葉を徹底的に否定するフローラは、既に彼女を母とは呼ばなかった。何故なら、もう既に先のことまでを考えていたからだ。どうせフローラはアシュレイ王妃は死ななくてはならない。ならばそれ以前に何をなすべきなのか、彼女は既に悟っている。

故に命じた。

「衛兵の皆様方、どうぞアシュレイ王妃をお連れになって。恐らく極刑が望ましいでしょう。王宮内のアシュレイ王妃の部屋もお検めになられた方がよろしいと思いますわ」

「フローラ王女殿下……」

「大丈夫。あなた達の行動は、正しいわ」

そう言って笑ったフローラが何を考えているのか、誰も分からなかった。

幸せ狂の終焉

その日はやはり、雨だった。

国に二度目の革命が起きた。グランヴィル一世はその娘フローラと心中し、冥府へと旅立っていったとされている。王妃アシュレイは、残酷な殺人王妃は、国民の前で処刑された。飛び交う悪罵と石礫、そして残酷王妃に相応しく無惨に処刑と相成った。

男爵家に生まれ、母に疎まれて使用人同然に墮とされた。その母を殺し、令嬢として暮らした。義長姉を死に至らしめ、義次姉を殺し、義母を殺して。不慮の事態により父を喪った。

そんな苦難に満ち溢れた人生を送った彼女を、しかし誰も憐れもうとはしなかった。ただ理由もなく血族を殺し回った悪女として歴史に名を残し、お伽噺として後世までその苦難を受け継がれた。

『悪女アシュレイ』は世の中の女性の規範から外れた最も悪い例として扱われ、人を殺した女性は男性よりも厳しく罪を問われるようになった。

誰も、アシュレイを理解しようとは思わなかった。血に濡れ、人殺しの快感を覚えてしまったアシュレイを理解できるはずがない、と。

だが、考えてほしい。アシュレイは本当に理解出来ない人物だったのか、と。本当に皆の言う『悪女アシュレイ』に望んで成ったのか、と。そもそも、アシュレイが虐待されていたのは周知の事実だ。父ローランド・カレラスはそれを後になるまで知らなかったが、彼がその事さえ知っていればアシュレイを守ることすらできたはずだ。アシュレイ自身にはどうしようもなかったことを、殺人以外の方法を彼女に求めるのは酷だろう。ローランドの了承を得ずとも出来る解決法が、アシュレイにはブランチの殺害しかなかっただけだ。

それで人を殺せば自らの地位が安泰になると学ばせてしまった大人にこそ、咎があるとは思わないだろうか。アシュレイに必要なものは、救いの手だ。決してナターシャから差し出される毒瓶ではない。

ヘザーを死に至らしめたのも、結局はそうだ。自分の求めるものを

殺人でしか得たことのないアシュレイが、ヘザーを殺す以外の選択肢を思い付くことすら困難であることなど言うまでもない。ただでさえ家名に泥を塗ったのだ。アシュレイ本人に危害を加えた時点で排除の考えが浮かぶのも致し方ないことだろう。

クレアの件に関しては、自業自得である。他ならぬクレアがその結末を望んだからこそ、アシュレイはクレアを殺すしかなかった。いざれ狂ったアシュレイは全てを滅ぼすと理解してしまったから、クレアはその時期を早めて被害者をいたずらに増やさないようにしたかっただけ。独りよがりな考えである上に、アシュレイの殺人に対する快感を自覚させてしまったという時点で最早擁護できない。

アシュレイがナターシャを殺したがつたのも、グランヴィルがアシュレイを満足させられなかったからに他ならない。満足さえ出来ていれば、あるいはナターシャは死ななかつたのかも知れなかつた。

全て、アシュレイだけが悪いわけではない。だが、もたらされてしまった結果は背負わなければならない。故にフローラは全ての罪を背負い、革命を裏で煽動して最後には責任を取る形でグランヴィルと心中した。そうやって誰かが死ぬことでしか、解決できないのだとフローラは思っていたから。

それら全ての要因が絡まりあつて、国が一つ滅んだ。全てが明かされることは、やはりなかつたのだが。

◎

むかし、むかし、あるところに。とてもうつくしいおひめさまがいました。おひめさまはとてもころやさしくみえていましたが、ほんとうはひとをころしたくてころしたくてたまらないかいぶつでした。そんなおひめさまを、ままははがいじめます。

「ほら、そんなところでねていないで！ さつさとそうじをするんだよー！」

「そうよそうよー！」

「ほんとうにきたないこね」

ふたりのあねもそうやってくすくすわらいます。もちろんひとをころしたいおひめさまは、そんなままははもあねもゆるすことはあり

ません。

「わたし、きたくないわ。ほら、もうそうはみえないでしょう?」
あるひおひめさまはそういって、あねのめをつぶしました。あねは
いたい、いたいといいながらころがりましたが、おひめさまにはどう
でもいいことです。おひめさまのあしにぶつかっても、きりおとし
てしまいました。

あねはそのままちをながしてしんでしまいました。

「わたしにさからうからそうなるのよ」

おひめさまは、そういってあねをきたないものをみるめでみまし
た。ですがもうあねはうごきません。なぜなら、もうしんでいるから
です。

またあるひには、きにくわないからといってももうひとりのあねにナ
イフをふるいました。もうひとりのあねはおひめさまがよろこぶよ
うなことばなんてなにもいいませんでした。

それがきにくわなくて、おうじさまとむすばれてかわいいむすめを
うんだおひめさまはママははをころしました。しねばなにもできな
いからです。

そして、もともとのやしきのなかのしようにんたちをころして、ち
をまきちらしました。

「あははっ、あはっ、これ、たのしいー!」

おひめさまはとてもこわいかおでわらって、ほかに、こわせるよう
なものはないかときました。しかし、やしきにはだれもいなくなっ
ていて、おひめさまにこたえはありません。

そうやって、おひめさまはみんなをころしてまわりました。だから
おひめさまのむすめはきめました。

「わたしがおかあさまをとめなくちや」

そうしてこのくにはかくめいがおき、おひめさまはいままでわる
いことをしていたむくいをうけてしよけいされました。

めでたし、めでたし。

幸せ狂達の夢（あとがきに代えて）

いつかどこかの、白いカーネーションが咲き乱れる庭園で。大きな円卓に座る人々がいた。どうやら会議のようなことをしているらしく、時折手をあげる様子が窺われる。ただ奇妙なのは、意見を取りまとめているようにも進行を務めているのも同じ幼い少女であったことか。

母に似た金髪を翻した美しい少女は、ぱんぱんと手を叩いて声をあげる。

「はいはい、もう。もう一回まとめ直しますよ？　良いですねお母様」

「ふ、フローラあ……まだやるのお？」

「当・然・で・す！　本当にもう……ちよつとは考えても良いでしょう!?!　どうすれば皆が幸せになれたのかって！」

ぷんぷん、とでも表現すべき表情でお母様ことアシュレイに食って掛かるフローラ。そこまでしてでも、どうしてもフローラは見つけたかったのだ。皆が幸せになれたのかを。どうせ時間はいくらでもある。ここに在る全ての人間が罪を犯したから。皆が皆、転生までに時間があり余っていたのである。

故にフローラは、まとめるために口を開いた。

「まずね、お母様。おばあ様がまず悔い改めるべきなのはもう分かっています。いくら間男の娘だからってお母様を虐待して良い理由はないですね」

ギロリとフローラが睨み付けたのは、彼女の祖母ブランチ。彼女が確かに全ての発端だ。故にフローラは自分の祖母であってもブランチに対して愛情を持ってない。

ブランチは申し訳なさそうな顔をして弁解する。

「め、面目次第もないわ……でも、愛せないのは分かるでしょう？」

「愛せなくても虐待して良いわけではありーまーせーん！　全くも……う……」

「ご、ごめんなさい……」

ブランチは小さくなって落ち込んだ。落ち込むような権利は無論

ない。ブランチの罪はアシュレイを虐待したこと。そして、間男を受け入れたことだ。受け入れさせられたとも言えるが、快樂に負けてそのまま関係を持ってしまったのはブランチの罪だろう。

フローラはブランチに軽蔑した視線を送り、そして一瞥もくれなくなった。彼女にとってブランチはそれだけの存在だ。母を殺人に誘った女を祖母だと思えるはずもない。

次に視線を送ったのがナターシャだ。

「で、義理のおばあ様？ 何で敢えてお母様に毒なんて渡したんですたっけ？」

「それはその……ちよつとしたイタズラ、みたいな？」

「イタズラで当時10才にもなっていない女の子に人殺しの道具を渡したんですよねー。それも精神を追い詰められた女の子に」

ナターシャは呻いた。当時はナターシャも追い詰められていたのだとはいえ、確かに子供に渡すべきものではないものであることだけは確かだ。全くもって大人げなかった。

そんなナターシャにフローラはやはり軽蔑した視線を送った。

「ぶつちやけ言って頭おかしいですよ、それ。毒瓶なんて渡したらどうなるかぐらい想像してくださいよいい年したババアが」

「ちよつとフローラ？」

「女の子に代理殺人させる人からの非難なんて聞ーきーまーせーんー」

フローラの冷たい言葉に、ぐふつ、とコメデイタツチに呻いたナターシャは机の上に突っ伏した。全くもって反論できない。確かにナターシャはアシュレイがブランチを殺すことを期待してしまっていた。フローラの指摘は全くもって間違っていない。

しかし、それに口を挟んだものがない。

「いや、フローラ殿下、その……それは実行したアシュレイが悪いのは……」

「は？ 是非寝言は寝て言ってくださいませんか、おじい様」

しどろもどろの言葉を、フローラはそうばっさり切り捨てた。おじい様の言葉が示すように、その相手はローランド・カレラスだ。孫

娘の冷たい視線にローランドはたじろぐしかない。

フローラはローランドに向けて厳しい声で告げた。

「そもそも、おじい様がお母様の状況を知らなかったというのもおかしい話です」

「……その、忙しくて。革命直後でしたし」

「だからって家族を蔑ろにして良い訳じゃないですよ。少なくともお母様の状況くらいは把握しておくべきなんじゃないですか？」

ローランドの表情はまるでぎゃふんとでも言いたげな顔。フローラはやはりそんなローランドに恨みをもつような顔で一瞥して、顔をそらした。フローラにとってローランドなど、母に興味のないジジイぐらいの認識しかなかった。そんな認識では、フローラがローランドを祖父として慕えるわけがない。

そしてフローラが次に視線を向ける前に、ヘザーが口を挟んだ。

「あら、今だからそう言えるのであって、当時のお義父様にそんな余裕があったとは到底思えませんわよ」

「へ、ヘザー……」

「そうでしょうね、ヘザーおば様。でも、今だからこそ可能性を探れるのだと何度言えば分かっていただけの？」

義娘に庇われたローランドは、しかしフローラの言葉に再び落ち込んだ。昔出来なかつた選択を、今になってどうこう言うのは確かに意味のないことだ。しかし、想像するだけならば自由だ。ローランド達大人はフローラに人並みの幸せすら与えてやれなかつたのだから、そのくらいは許容してしかるべきだろう。

そうは思うが、ヘザーはフローラに反駁したい理由があった。

「誰がおば様ですって？」

「言葉的には間違っていますよね、ヘザーお・ば・さ・ま？」

フローラの言葉にヘザーはうぐ、と喉の奥で息を呑み込んだ。

「そつ、そそそそうだけど！ 女子としてはせめてお姉様ぐらいが良いというか……ね？ 分かるでしょう？」

「わたし、残念ですけど15まで生きてませんから分かりません」

見事に地雷を踏んだヘザーは黙り込んだ。いつもながら、地雷源で

ワルツを踊るのがお好きなようである。なおステップは遅いので、残念だが爆発しても逃げられない。

そしてそんなヘザーに矛先は向いた。

「で、ヘザーおば様は何で舞踏会で敢えてお母様の身分を明かそうとしましたんです?」

「そ、それは……釣り合うわけないと思ったからよ。アシユレイが仕出かしたこともそうだし、当時は男爵令嬢だったから、身分も、全てが釣り合わないって。……まあ、何故かドレスが裂けたから言えなかつたけど」

無論、このことがヘザーの罪だと言うつもりは毛頭ない。ただアシユレイが前日の暴力を含めてヘザーから貶められていると勘違いしただけだ。

ヘザーはごによごによと話を続ける。

「それに、妬ましかつたのよ。だってグランヴィル王子と先に知り合つたのは私だったわ。脈がないとも思えなかつた」

不敵に笑ってそう言ったヘザーだったが、それは当の本人から否定された。

「いや、私は別にミス・カレラスには興味などなかつたが?」

「えっ……」

「確かに美人ではあるが、残念ながら顔付きだけで性格がきついのは分かりきっていたからな。私よりもむしろ宰相以下の廷臣達の妻にはどうかと考えていた」

あ、あんですすつてえ、と言わんばかりの勢いでヘザーはグランヴィルに詰め寄ろうとした。しかし、彼の瞳に嘘の色がないことに気付いたヘザーはそのまま前のめりに卒倒した。

フローラはヘザーを放置し、グランヴィルに向き直った。

「それで、お父様は何でお母様の身分が低いにも関わらずお妃にしましたんです?」

「み、身分は関係ないだろう。愛し合つてさえいれば良いと両陛下には言われていたからな」

ふんす、と胸を張つたグランヴィルは、しかしフローラに憐れむよ

うな顔で見られた。

「……それは何かもう、諦められていたのでは……？ お二人ともご健在でしたし、何より革命直後に権威付けするのであれば、公爵家にも適齢の女性がいらしたでしょう。それを指示されていなくて、かつまだ革命を起こせる余地を残されているってところあたりがもう、ね？」

「……いいや、あの、そもそもそれだとお前が産まれないというか、な？」

流石にそれはどうかと思う、とグランヴィルは言うのだが、フローラは冷たかった。もつとも、フローラが優しくする人物などここにはいないのだが。

「別に私が産まれてこなくても誰も困らなかつたでしょう？ 結果的に二回目の革命で死んでおけて言われたわけですし」

「それは……私達親が不甲斐なかつたからだ。決して誰もお前に死ぬと言いたかつたわけではない」

「お父様は『王女フローラ』が死ぬ必要はあつたけど、ただの『フローラ』が死ぬ必要はなかつたと言いたいんでしょ？」

馬鹿馬鹿しいわ、とフローラは笑った。フローラがフローラである以上は王女であることを捨てられるはずがない。彼女はグランヴィルとアシユレイの娘であることから逃げられないのだ。たとえば他の何から逃げられたのだとしても、たとえどれほど世間から屑扱いされる親だとしても、親からは逃げられない。

もし仮に物理的に距離をおけたのだとしても、周囲がそれを許さない。アレは貴様の親であるからにして、貴様も同じく奴らの責任を取れと言われるのである。大人は一個の個人として社会に扱われるというのに、そういうところだけは家族としての責任を求めるあたり、社会というものは矛盾している。

どうせ死ななければならなかつたフローラは、最早語り合う価値のないグランヴィルから視線を外した。ずっと話し合ってきたなかで、一番の問題児と会話するためだ。誰にも理解できなかつた、憐れな女と。彼女こそがフローラを死に至らしめるための一手を打った存在。

全てを無に帰す選択をした者だ。

それは、今まで沈黙を保っていたクレアだった。

「それで、クレアおば様。おば様はどうしてお父様にフォークなんて投げたんです？」

「……悪いけれど、言うつもりはないわ」

フローラの問いに冷淡に返したクレアは、そのまま下がろうとする。しかし、この茶番はかれこれ数年は続いているのだ。クレアに強制的に口を割らせ、いい加減終わらせたくなるのも無理はない。

周囲の人間に取り囲まれ、席に着かざるを得なくなったクレアはため息を吐いて困ったように呟く。

「言っただって誰の救いにもならない話なんて、しても仕方がないじゃない」

「それを決めて良いのはおば様だけじゃないわ。決めるのは皆、よ。皆それぞれが答えを見つければ良いの。その答えをおば様が決めつけるのは皆に失礼だわ。だから教えて、おば様。どうしてお父様にフォークなんか投げたの？」

その答えを、クレアは渋っているようだった。誰もが幸せになれる答えなんて必要ない、とフローラが考えているとも思えるこの状況に、果たして自分の選択を告げて良いものかと。

ただし、言わない限りこの茶番は終わらない。だからこそクレアは口を割らざるを得なかった。

「……族滅です」

「はっ？」

「だから、族滅が目的です。わたくしはわたくしを含め一族の皆に罪があることを知っていましたから」

そのあまりの答えに皆は絶句した。クレアの答えとは、罪があるから皆死んでしまえと願って、王族に弓引いたということだ。あまりに無謀にして確実、周囲をすべて巻き込む最悪の自殺の方法だ。

クレアは誰も口を開かない中、言葉を続けた。

「アシュレイはブランチ様を殺しました。お父様にはアシュレイの保護責任がありました。お母様も、毒瓶を渡したという殺人幫助の罪が

あります」

ですが、とクレアは続けた。

「ですが、グランヴィル陛下、フローラ殿下。あなた方を巻き込むつもりはありませんでした。正直に言って先王先皇后両陛下が血の繋がりのあるお二人を害するとは思えませんでしたので」

「……つまり、革命が起きたのはクレアおば様のせいではない、と」「わたくしには、そもそも革命を起こせるだけの地位も力もありませんから。契機を作ってしまったのは確かでしょうが……」

あくまで、クレアは革命を起こしてしまったことを認めなかった。だが、フローラにとつてはそれで十分だった。

何故なら、革命を起こさせたのはフローラなのだから。

全てに絶望し、父ごと死のうと思つたからこそフローラは形振り構わなかった。父方の祖父母に全てを打ち明け、最後に責任を取る形である意味自殺したフローラも罪人であるともいえる。

カレラス辺境伯家を滅ぼしたのはクレアだ。しかし、王家の血を絶やしたのはフローラだった。

そんな罪人だらけのお茶会で。フローラは一つの結論に達する。

「……なあんだ。最初から……私は。たとえ何があつたのだとしても、結局死ぬしかなかったんじゃない」

絶望から自らを救いたかった。しかし、全ての事実を知つて掬われてしまった。再び絶望に巢食われてしまって、もう救われることなどあり得なかった。

だから。フローラは、全てを知るために集めた死者の群れから逃げ出すことしか出来なかった。

そこに、救いなど、なかった。